

## Caitya-lakṣaṇa-vidhi 訳解

吉 崎 一 美

Caitya-lakṣaṇa-vidhi は独立した文献ではなく、漢訳『造像量度經』の梵文原典 *Daśātala-nyagrodha-buddha-pratimā-lakṣaṇa* (PL.) に対する註釈 *Sam-buddha-bhaṣita-pratimā-lakṣaṇa-vivaraṇi* (PL. V.) 中の一節である。この直後には金剛杵と金剛鈴の特相を説く一節があり、これについてはすでに小論を発表しているので、上記諸文献の検討は省略する。ところが、この両節は、実は Jagaddarpaṇa (あるいは the siddha named Dar-paṇ=darpaṇa-ācārya) の Vajrācārya-Kriyāsamuccaya (VKS.) にもそのまま収録されている。そしてこの VKS. には、12世紀の学匠 Abhayākara-gupta との関係が強く認められる。即ち、VKS. の中頃には *Niṣpannayogavali* がそっくりそのまま収められており、またその前後では、同じく彼の *Vajravali-maṇḍalopayika* が、その内容をほぼ同じくした順で増広されている。それで換言すれば、VKS. の独自性はもっぱらこの増広部分に認められることになる。ここに紹介する *Caitya-lakṣaṇa-vidhi* も、この増広部分にあたるもので、その説くところの caitya の様相は、実際の caitya を理解するための一資料となりうる。なお、PL. V., VKS. とともにその成立年代は今後の研究課題である。

以下は PL. V. 4 種、VKS. 9 種のテキストからの該当部分の校訂文である。PL. V. に NS. 763, VKS. に NS. 776, 784, 835, 974, 1049, 1086, 1089 (NS. 562 写本の reproduce という) の写本が含まれる。

caityantu kumbhakanakadhānyarāśilātākhyabhedāt yathāsaṃkhyam ṭhakārākṛti-cūḍikābhaghagāṇḍatīlasannibham || caturasre kṛte kṣetre dvādaśābhājite || ekasārd-dhadvikonayorbhāghaharaṇavarttanāt bimbam syāt || bimbārdde nemikānviṭam || bim-bārdham pīṭham || tadvadharmimastakāntam bimbāyatam chatram || taccaikatra-yapañcatrayodaśam sambuddhava-jradharāṇām || navasaptapratyekaśrāvaka-buddhayoḥ || avītarāgadhātucaitye padmakalikaiva param nānyat || tathā bimbābhedenā yaṣṭyāro-panam karttavyam || caturbuddhāsanam punarvairocana-pradhānikṛtam || bimbādvāhye caturbhadre caturbuddhāviraṇitām || koṇe stambhāropanam kuryāt bodhisatvādivbhū-ṣitam || chatrākāram tu yaṣṭyūrdham varṣāsthālaka-saṃjñakam || hārārdhahārag-

haṅṭhādikiṅkiṇījalabhūṣitaṃ || tadūrdhaṇca maṇiḥ kāryaṃ padmakalikaṃ tu kecit ||  
vidhinā lakṣaṇopetaṃ kārayedvidhikovidah || iti caityalakṣaṇavidhiḥ ||

さて caitya には4種の別があるという。しかし蔵訳は ‘mchod-rten gyi bum-pa ni~’ とあって一定しない。これをドーム型の覆鉢の形状とすれば、それについて言及する他の文献の名称とは一部が一致するのみである。対応する *ṭha* 字以下の4つの形については、PL., PL. V. に説かれる仏菩薩等の4種の顔 (kukkuṭāṇḍaṃ tilākāraṃ caturasraṇca maṇḍalaṃ || sarvasāmānyaliṅgānāṃ mukhākṛtiścaturvidha || PL. V.), また造像量度經に図示される「如来満月面 菩薩鷄子面 仏母芝麻面 明王四方面」と関連があるとすれば、そこには4区分された仏教諸尊のパンテオンを、何らかの方法で caitya に再現しようとする意図がうかがえよう。12区画の四角形とは、2×6の正方形より成る矩形である。校訂文ないしは異本 ① *ekasārdhaṃ dvisārdhaṃ*, ② *ekasārdhadvisārdhatrikopaṇā*, ③ *ekasārdhadvisārdhadvikoṇa~*, の如くに読めば、4×3に区分する可能性もないではないが、蔵訳に“2.5と3.5の部分の両端からはみ出させて丸くして A. 覆鉢 bimba とする”とあるのを採るのが妥当であろう。覆鉢の半分は礼拝のための B. 回廊 nemikā を備えており、他の半分はその C. 基台 pīṭha である。

D. 平頭 harmi [kā] と [caitya] の頂 *mastaka* の間は覆鉢と同じ長さで、それを E. 傘蓋 chatra の区域とする。そしてその caitya に表現された聖者の別によって傘蓋の数が異なる。諸正覚と Vajradhara は1・3・5・13枚であり、縁覚・声聞は9と7である。Gustav Roth (*Symbolism of the Buddhist Stūpa*, 1980) は根本説一切有部毘奈耶雜事から傘蓋の数の相違に関する記事(諸如来の塔には13, 縁覚のものには雨よけが無く、……阿羅漢果には4, 不還果には3, 一來果には2, 預流果には1, 在家者には傘蓋がつけられない)を引いて、その関連を指摘している。Hemarāj Śhākya (*Nepal Saṃskṛtiyā mālukhā*, NS. 1089) は13の傘蓋を13地に見たて、1~5を声聞地、6~9を縁覺地、10~11を大乘、12~13を金剛乗とする。

*dhātucaitya* とは聖者の遺骨を内蔵する caitya のことであろう。*sadhātucaitya* が蔵訳でそのように解釈されている例がある。*avītarāga* を H. Mitra (1933) は *vītarāga* として、両数の属格を補足し、前節の縁覺・声聞にかけようとする。しかしここでは‘欲望を離れていない者の遺骨を内蔵する caitya’では、その先端が蓮華の蕾の形をしていると解釈すべきである。それ以外のときには F. 宝珠

maṇi が置かれるとの文が後段に見える。

このように覆鉢が区別されて、G. 傘竿 *yaṣṭi* の建立がある。覆鉢の外側の 4 方の吉祥処には 4 仏が飾られる。これは Vairocana を主尊とする H. 4 仏の座 [像] である。[4] 隅には I. 柱 *stambha* が配され、諸菩薩が荘厳される。傘蓋は傘竿の上、J. 雨よけ *varṣā-sthāḷaka* [の下] と知られる。[傘蓋からは、あるいは覆鉢には?] K. 瓔珞・半瓔珞・鈴・網状の小鈴 が飾られる。その上に宝珠が取り付けられる。これはある場合には蓮華の蕾である。規則通りに特相を具備した [caitya] を規則に通じた者は作るべきである。以上が caitya の特相である。

このように、この短かいテキスト中では、caitya の各構造に体系的な教理の意味づけを施していないのが特徴である。最後に、テキストから得られる caitya の像を図示すれば次のようになる。斜線部分は筆者による。

<キーワード> Caitya, Kriyāsamuccaya, Pratimālakṣaṇa

(東洋大学大学院修了)

